vol.483

mj "高は高才、信は信義、信頼はマック"
THE MAC JOURNAL
三菱商事アグリサービス株式会社

◆ 2016年9月14日発行ラインナップ
・2016年産米の作柄動向と作況の行方
・第42回東北トモエ会営農現地研修会

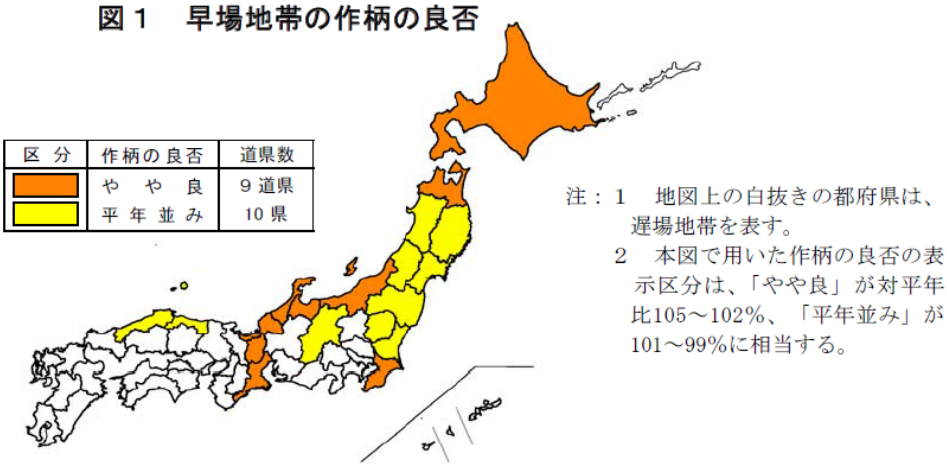
2016年産米の作柄動向と作況の行方

作況指数は平年並み？在庫は品薄で米価上昇機運あり

農水省は8月30日に8月15日現在における水稲の作況を発表した。東日本の19道県における早場地帯の作況指数は「平年並み」または「やや良」となっており、田植え以降天候に恵まれた事から概ね順調に生育した結果だ。また、西日本の遅場地帯における27都府県の生育は総じて「平年並み」としている。宮崎・鹿児島・沖縄等の早期栽培地帯については長雨による日照不足の影響で９７、９６、９５と「やや不良」となった。ただし、台風７・９・11号における影響は発表時点ではまだ数値に盛り込まれていないため今後は変動する可能性があり留意が必要だ。

2015年産の6月末時点での民間流通在庫は速報値で145万トンとなり、店頭及び生産者在庫を合わせるとほぼ農水省の予測通り205万トンで推移、今年度産の主食用の生産目標である743万トンが達成出来れば29年産の6月末在庫予想量は185万5千トンとなり200万トンの在庫を切る計算となる。民間流通在庫が200万トンを切るか切らないかがその年の米価を占う指標のひとつとなっており28年産が大豊作でなければ昨年よりも米価が上向く可能性が高い。全米販試算では本年度の生産数量目標値が743万トン、需要量が758万（農水省試算では762万）トン、作況指数が100であった場合、２７年産の10月末時点での1年古米在庫見込みでは17万トンとかなり少ない在庫量となる（26年産の10月末の1年古米在庫は52万トン）。現在、食の多様化や高齢化により一人当たりのコメの年間消費量は28‐29年の主食用米の需要見通しで8万トン程度の減少が予測されているが、その状況下の中でも外食・中食、業務用分野での消費量は僅かながらも拡大している。この分野におけるコメの価格帯ニーズは安価に利用出来る価格帯品種となっているのだが、利用される価格帯のコメは飼料用米に転換されている部分が多く品薄となっており価格上昇率が高い。本年7月現在の平成27年産米の相対取引価格で対前年比120％以上価格上昇している銘柄は青森県まっしぐら、つがるロマン、秋田県めんこいな、福島県コシヒカリ（中通り）、栃木県なすひかり、群馬県あさひの夢となっておりいずれも業務用筋に人気の銘柄となっている。よって、商社や米卸は業務用筋に人気の銘柄確保に全国を奔走している話が聞こえてくる。台風7号、11号が関東・東北地方の海岸を沿うように上陸、北上、盆過ぎよりゲリラ豪雨が関東周辺でたびたび観測されており収穫間近の早生品種生産地域では早刈を余儀なくされたり、倒伏被害に見舞われた所もある。10月15日発表の作況指数が最終的な米価を左右することになると思われるが、価格動向に注視したいところだ。

図１　早場地帯の作柄の良否



第42回東北トモエ営農現地研修会 IN 青森

9月8日に五所川原市にて東北トモエ会営農現地研修会が行われ、東北5県のトモエ肥料を取扱う販売店とメーカー・弊社合わせて総勢29名参集し盛大に執り行われた。本現地営農研修会は42回を数え、各ブロックのトモエ肥料を取り扱う会合の中でも一番長きにわたり継続研鑽が重ねている。東北5県の特約店において持ち回り制で各販売店が主催となりトモエ肥料の使用はもちろん、実証圃を設営し参加者全員で批評を行い技術取得の一助となっている。今回は木造町の有限会社トモエ商事が主幹事となり、ネギと水稲の展示圃を設営頂いた。展示圃設営目的は白ネギにおけるトモエ化成とソミックスとダイヤロングの肥効確認、水稲においては米の匠とL肥実効、ダイヤロングの肥料の違いによる生育の違いを確認した。トモエ化成の特徴は緩効的に肥効が続く成分が配合されている、根と環境にやさしい化成肥料であるが、そのエッセンスをベースに生かして更なる緩効的に肥効が持続するノンコーティング型の肥料開発が進められている。現在、全国各地において作物毎のデータ収集をはかっているところだ。

今回は青森県内においても徐々に浸透している「まっしぐら」における鉄コーティング種子による湛水直播栽培に適する施肥量を確立すること、昨年悲願の県内初の特Aを獲得して話題となった「青天の霹靂」において使用肥料の違いによる施肥効果を確認することが目的。主幹事の有限会社トモエ商事澁谷専務曰く、所有する田んぼで試験を行うことにより自ら経験した栽培方法や販売している肥料の特徴を知ることが生産者へPRするときの重みが絶対違うとして積極的に「実験台」となっておられるようだ。今回の展示圃は湛水直播栽培について、レベラーを用いなくても現在持っている機械でどれだけ作りこなせるか、という挑戦と最近上市されたダイヤロングの肥料の特徴を理解するために既存の販売する肥料との比較を行い自己研鑽に努められている。とても現場目線の取り組み方法で肥料商売における手本といってもよいだろう。水稲においては実際に刈るまでのお楽しみというところではあるが、達観では肥料の違いにおける生育度合の違いが見られたことから肥料の特徴を理解する上でとても参考になる実証展示圃であった。青天の霹靂については現在、山形県でのつや姫の成功事例に習い、追いつけ追い越せでブランド化定着のためのひと手間かけた管理手法を栽培者全員で取り組まれているようだ。窒素肥料における基準施肥量の順守はもとより、現地における穂肥施肥時期前の生育診断は勿論、出荷基準のタンパク質含有量の設定や各栽培圃場の1点1点を定点観測し衛星で取られた生育写真を元に刈り取り適期をはじき出して品質の安定化を図ろうとしている。これは青天の霹靂を確固たるブランド化する上でとても大切な取組であろう。つい前日まで29℃であったようなのだが、当日は低気圧の影響で23℃となり時折の雨と風が強く肌寒い現場ではあったが、熱心に現場を視察することが出来た。来年は岩手県での開催予定となっている。本会のますますの発展を祈念したい。（東京支店）

この度の台風10号による豪雨被害に遭われました皆様には心よりお見舞い申し上げます。実りの秋に向かい、天候が安定することを心から祈るばかりです。

編集事務局：南部、助川
電話：03-5275-5511/E-mail： macjournal@mcagri.co.jp URL http://www.mcagri.jp